

辭書

松井 簡治

緒言

辭書とは、一言にしてこれを言ひ表はせば、「語を蒐集して、これを索出する者に便利な順序に排列して説明を加へた書である」といへよう。ここに便利な順序とは、字畫順・音韻順・事項順・いろは順・五十音順・アルファベット順等が考へられ、事實その何れの方法も試みられてゐる。

辭書を内容から大別すると、語義を主とするものと、語の表はす事柄を主とするものとする事が出来る。前者は普通の辭書で、後者は専門辭書又はその綜合ともいふべき百科辭書である。普通辭書は、各國語の意義を闡明するのを主要の目的とするから、各品詞に涉り、その語原・發音・アクセ

ント・變化、その表はす種種の意味・成語・成句・同義語・對語等を掲げること努める。

これに反して後者は、語そのものの意義よりも、その表はす事柄の解説を主とする。従つて殆ど名詞のみが對象となり、且つ専門的の解説が内容となる。尤も普通辭書と雖も、事柄の説明を缺くものではなく、比較的大なる普通辭書には、多少ともその説明が加へられてゐる。

次に我が國に於て、注目すべきは漢字の辭書である。これは語の解釋といふよりは寧ろ文字の説明が主眼であつて、字典又は字書の名で呼ばれてゐるが、最近の字典には、文字の解釋の外に、それを用ひた熟語を掲げて、これが説明を掲げてゐるから、この意味では一種の辭書である。而して、その排列が字彙順によることは周知の事であらう。熟語の釋義を加へた字典と普通辭書との關係及びこれが統合に就いては、後に詳述する。

本稿に於ては、本講座の性質上、普通辭書を主として述べるが、沿革の項では、百科辭書及び字典にも少し觸れておくこととした。

辭書の沿革

我が國古來の辭書は、大別して漢字字書と國語辭書との二種に分れ、國語辭書は其の體裁から更に

音別（いろは又は五十音）と分類別とに分れる。但し又兩者を混用するものもある。

(一) 平安時代 我國で編纂された字書で現存最古のものは空海の『篆隸萬象名義』卅卷であるが、是れは支那の顧野王の玉篇を鈔録したもので、玉篇に種々古本を引用して注解した部分丈を削つて字音も字解も全く其の儘である。純粹に我が國人の手に成つたものとしては『新撰字鏡』十二卷が始めである。經昌住の著で宇多天皇の寛平四年に草案して、醍醐天皇の昌泰年中に成つた。部首によつて漢字を集録し音訓を附した。字數は二萬九百四十餘あり、猶他に親族の部、男女裝束の部等の十三部類に分つて漢字及び熟語を収録してある。

次いで出たのは『和名類聚抄』で、分類辭書の始めである。漢語に和名を附し、事項により分類してある。源順が醍醐天皇第四皇女勳子内親王の命により朱雀天皇の承平年間に編纂した。もと十卷であつたが、平安末期に官職・國郡・殿舎・時令・樂曲・湯藥等の和名や訓註のないもの六部が増補せられて、廿卷となつた。この系統を引く百科辭書的にものに少し後れて『藤原資隆が鳥羽天皇第三皇女八條院に獻進したもので、壽永二年頃の撰になり、後人が次第に書續き、最後は後醍醐天皇の元徳二年まである。』・『二中曆』（古く掌中曆・懷中曆といふ兩辭書があつたが、今殘缺して完本がなく、其の兩書を併せた二中曆が幸に存在してゐる。官職・醫方・宮城・經史等の十三帖に分類してあり、是れも後の書繼があつて

最後は嘉吉文安頃に及んでゐる。等があり、この種の辭書が次第に發達して、江戸時代に至つて百科辭典の體となつた。

又、新撰字鏡の後をうけて平安末期に出た漢字字書としては「類聚名義抄」がある。佛法僧の三昧に分けて十一卷、菅原是善の作と傳へられてゐるが、高田興清は堀河・鳥羽天皇頃の著かといふ。是れも部首によつて漢字を収録し片假字で音訓を付し、訓には朱點で平上去の符を付けて音の抑揚が示されてゐる。

其他、作詩の爲に作られた三善爲康の「童蒙韻」や、菅原是善が十三家の切韻を集めて作つたといふ「東宮切韻」及び藤原季綱の撰んだ「季綱切韻」等の韻引辭書があるが、東宮切韻・季綱切韻は今日散佚して傳はらない。但し最近「季綱切韻」の殘缺かと思はれる鎌倉初期頃の古寫本の發見せられたものがあり、内容が分類體となつてゐて、後世の辭書の分類の基準となつた「伊呂波字類抄」の分類に直接影響を興へたと認められる注意すべきものである。

「伊呂波字類抄」は、音別辭書として整つたものでは最も古く、橘忠兼が天養・久安頃の著で、始めは、「世俗字類抄」といひ、二卷であつたが、治承頃に増加して三卷となり、「伊呂波字類抄」といつた。但し題號は書物により各自兩存してをり、猶後人が追加して壽永以後に十卷となつた。伊呂波順に字

訓・熟語・事項等を収載し、更に其の中を二十一部に分類して社寺・國郡・姓氏等の固有名詞まで舉げたのは辭書の大進歩である。この書の異本ともいふべきものに「節用文字」があるが、是れは三卷本伊呂波字類抄より古い姿の本を書寫して増補したものといはれてゐる。

(二) 鎌倉時代 古歌中の難語を集めて釋した純粹の國語辭書としては平安末期に「綺語抄」と「和歌童蒙抄」とがあるが、鎌倉時代に入つてからも、上覺が建久年間に著した「和歌色葉集」・順徳天皇御撰の「八雲御抄」・資宗王御作といふ「和訓精要抄」・傳慈鎮撰の「色葉和難集」等があり、其の中に「和訓精要抄」は神代紀に見える古語を釋し、語源を説いたものである。又、鎌倉中期に出たものに「名語記」五冊があり、當時の俗語をも收め、語源を解く等、伊呂波別の國語辭書として特色のあるものである。惜しむらくはもと六冊の中第一冊を缺いてゐる。

此の時代の漢字字書としては土御門・順徳天皇頃菅原爲長の作といふ「字鏡集」廿卷がある。體裁は大體類聚名義抄に似てゐるが、部首を天象・植物・動物等に分ち、天象には天・雨・日、植物には竹・米、動物には人・馬等、偏旁を字義に依つて分つて檢索に便にしてゐる。鎌倉末期には作詩の爲のものとして「平他字類抄」三卷・釋師鍊撰の「聚分韻略」(室町時代に組織を改め「三重韻」として刊行されたものが多い)等が出た。猶又佛教に關する諸經の音義類(法華經音義等)も前代以來多數あるが、

今は省いておく。

(三) 室町時代 室町時代の漢字字書としては、其の初期に作られた『倭玉篇』があり、漢字の音訓を知る爲の通俗字書として慶長年中に數次の刊行を見て以來盛に世に行はれ、又同じ頃支那の大廣益會玉篇も出版せられ、其の増補本は明治年間まで廣く行はれた。

分類辭書としては文安元年に京都の禪僧の手になる『下學集』二卷があり、室町時代には最もよく行はれた。十八部に分類し、漢字漢語を収載して注を加へてある。なほこの類のものに、『撮壤集』三卷(享徳三年飯尾永祥撰)・『類集文字抄』(現存一卷)等がある。

倭玉篇・下學集と相並んで最も行はれたものに「節川集」があり、文明以前に出で、いろは別として更に分類體となつてゐて、書簡や文書等に用ひる文字熟語を集録して通俗的であつたから、室町末期にも兩度刊行せられ、慶長以後明治の始めまで一般に廣く行はれて、種々の類本が出版せられた。

(委しくは大正五年刊『古本節川集の研究』参照)又この類のものとしては『溫故知新書』三冊(文明十六年大伴廣公著)があるが、是れは五十音引の分類體で、五十音引辭書としては最も古い。又、「運歩色葉集」四卷もあるが、いろは別丈で分類がない。天文十七年に成つた。なほ運歩色葉集とは別本であるが、一層内容が増加した形のものに分類を施した辭書も近來發見せられた。原本に書名が無いので

假りに「色葉字訓」と名づける。

室町初期以來多數の辭書は、主として書簡や文書を認める參考に供する實用的のものであつたから、解釋に重きを置いたものは少かつたのであるが、和歌・連歌の流行により、和歌の解釋や古語を使用する爲に「仙源抄」(長盛天皇御撰)・「類字源語抄」(惠梵撰)・「和歌藻蘊草」廿卷(月村宗碩撰)・「匠材集」四卷(里村紹巴撰)・「無言抄」三卷(釋應其撰)等が出来た。何れもいろは別である。

(四) 江戸時代 江戸時代に入つてからは倭玉篇・下學集・節用集等前代のものが其の儘度々刊行せられ、或は増補重刊せられて廣く世に行はれたが、追々今日の國語辭書の體裁を具へるに至つたものも現はれる様になつた。

荒木田盛員は、父盛徴の遺志を繼ぎ、貞享二年に「鸚鵡抄」百二冊を脱稿した。是れは第二字目以下もいろは別に語を排列してある。

又・古語・雅言・俗言・方言まで五十音順に收載したものに「和訓栞」がある。谷川士清の著で九十三卷を上中下に分ち、上卷には古語雅言を收めて四十五卷、中卷は専ら雅言のみを三十卷とし、下卷には草木・鳥獸・方言・俗言を收めて十八卷、語數凡て一萬九千九百九十語、明治以前に於ける最も完備した辭書である。この他に雅言のみを収録したものでは、「雅言集覽」があり、五十卷廿一冊の

いろは順の辭書で、石川雅望の著である。關豊脩が補ひ、後又中島廣足が増加してゐる。別に仙臺の保田光則の「な」までの増補が十三卷あり、又同書が「ら」以下が寫本で傳はつてゐるのを知らずに著した續篇卅二卷があるが、是れは雅望の原著よりは劣つてゐる。

俚言を主として蒐集したものでは、『俚言集覽』廿六卷があり従來餘り類の少い好著である。著者は村田了阿と傳へられてゐるが、實は福山藩儒太田全齋であるといふ。

此の他に田澤仲舒の作で『語籠』四十五卷があり、五十音順とし、和訓栞・雅言集覽等からも語彙を蒐集したもので餘り参考にならない。『みをつくし』十五冊は紀州の人吉田安年の著で安政二年に成り、いろは順で五百十二部の参考書を用ひて編纂したものである。

又百科辭典の體を整へたものとしては、『類聚名物考』(山岡浚明著、三十二部、三百四十六卷)や『古今要覽稿』がある。古今要覽稿は屋代弘賢の著で、栗原信充・松岡行義・橋本好春等が分擔して編纂したもので、五百八十四卷あつたといふが、散佚して卷數が未詳である。

猶圖畫を主として事物を集録したものには、『和漢三才圖會』百五卷目一卷がある。正徳二年寺島良安の著である。

(五) 明治時代 明治に至り文部省に辭書「語彙」の編纂寮を設け、木村正辭・横山由清を總裁とし

て大規模の計劃が立てられ、明治四年五十音の「あ」の部の刻が成り、後十四年に「う」まで十二巻出版せられたが、中止となつた。

又、漢字字書としては、明治十七年に「明治字典」が大成館から出版された。この書は重野安繹を總編者とし、小中村清矩・小杉楳郎が、新撰字鏡・類聚名義抄・字鏡集等を參酌して國訓を附し、支那人張磁昉が北京音、朝鮮人李樹廷が韓音訓を付し、プリンクレーの英譯をも載せて大規模の計畫であつたが、四十巻の内、四巻まで十八冊で是れも中止した。なほ又漢語の通俗字書では、明治五年に村會が開設せられた爲、議員の演述用に多數の小字書が出版せられた事も注意を要する。

其の後「語彙」等の後をうけて成つた重要なものを挙げると、十八年には近藤眞琴の「詞の園」六巻廿四年には大槻文彦の「言海」、翌廿五年には、山田美妙齋の「日本大辭書」一卷、廿六年には物集高見の「日本大辭林」一卷、卅一年には落合直文の「ことばの泉」一卷が出てゐる。

山田の「日本大辭書」は、その後同人によつて増補が企てられ、明治四十五年「大辭典」の名で、上下二巻が刊行され、落合の「ことばの泉」は、明治四十一年に嗣子直幸及び直文門下の人人によつて、「大增補日本大辭典ことばのいづみ補遺」が刊行された。この刊行に先立つ一年、金澤庄三郎の「辭林」一卷が世に送られた。

字典の編纂は、「明治字典」の後見るべきものがなかつたが、明治三十六年三省堂の「漢和大字典」が出版され、熟語も收容されたが、明治字典と同様にこの熟語は現在のと異つて、最後の字で排列されてゐた。

百科辭書としては、明治二十四年に經濟雜誌社の「日本社會事象」二卷があつて、近代的百科辭書の先驅として忘るべからざるものである。又、明治二十九年より實に三十五年の長年月を要して完成された神宮司廳編纂の「古事類苑」(五十部三百五十五卷)は、最も注目すべき出版である。これらもと文部省の事業として、當時の碩學を動員して編纂に當らしめたものである。

現在の辭書と今後の辭書

明治以後の出版に係る現在の辭書は、その數夥しく枚擧に暇がない。されば緒言に斷つた如く、専ら普通辭書のみに就て述べ、百科辭書乃至専門辭書は割愛することとする。

現在の辭書

現在の普通辭書としては、大正四年に第一卷を出し、大正八年に完結した、上田、松井の「大日本國語辭典」四卷と、昭和四年に第一卷を出した「言泉」五卷とがある。後者は前記落合直文の「こと

ばの泉」を、芳賀矢一が大増補を加へたものである。この兩辭書の間即ち大正十四年に「廣辭林」が刊行されてゐる。これも前記の金澤庄三郎の「辭林」の増補版であるが、前者に比して、約倍大の内容となつた。

更に昭和七年に大槻文彦の「大言海」第一卷が刊行され、昭和十年全四卷が完成した。これより先、昭和九年に平凡社の「大辭典」第一卷が出版され、同十一年に全二十六卷の完結を見た。昭和十年には、新村出の「辭苑」が刊行され、次でその抄録ともいふべき「言苑」が出た。又昭和十四年には、「大日本國語辭典」第一卷の修訂版が成り、昭和十六年第五卷が完成し、引續き増補卷が進行中である。

以上の外、所謂特殊辭書ではあるが、なほ國語辭書として、大正八年折口信夫の「萬葉集辭典」、昭和三年佐藤鶴吉の「元祿文學辭典」、昭和四年松岡靜雄の「日本古語大辭典」、昭和五年樋口慶千代の「近松語彙」がある。第一は萬葉集、第四は近松作品の語彙の辭書であり、第二は西鶴・近松の作品の語彙、第三は紀記萬葉を中心とした古語の辭書である。

字典としては、大正五年服部、小柳の「詳解漢和大字典」、大正六年上田、岡田の「大字典」、大正十二年簡野道明の「字源」、昭和十四年鹽谷溫の「新字鑑」等があり、何れも熟語を收容して語義の解

釋を行つてゐる。

今後の辭書

國語辭書と漢和字書 現在我が國では、一枚の新聞紙中の語句を辭書に就いて檢索しようとするには、國語辭書と漢和字書との二部を備へなければならぬ。これは音標文字と象形文字とから成り立つてゐる國文だから止むを得ないのであるが、然し辭書と字書とを對比して見ると十中六七割は重複してゐる。これは何とか一部に整理統合する必要があらう。これが試みとして「大日本國語辭典」は、漢字を以て表はされてゐる熟語の頭文字を總畫順に排列した索引を設けてゐる。「大言海」亦同様の索引が編纂されてゐる。この二つの辭書に於ては、この索引を活用することによつて、或る程度前記の目的を達成することが出来よう。然しながら、文字の釋義は、なほこれを漢和字典に委せてあるから熟語を構成する漢字各箇の意義は、完全にはこれらの辭書では知るを得ない。平凡社の「大辭典」は、あらゆる漢字を、その音によつて本文の語の中に混在せしめてをり漢和字典との兼用の問題を解決しようとしたが、文字の解釋を語の解釋中に混合することに疑問があると共に、漢字の性質上、同音の文字が十數頁に亙つて列ぶため、短時間には檢出が殆ど不可能である缺點があり、而も卷末の索引が夥しく省略されたため、所期の目的を達し得て居ない憾みがある。

されば、この後の問題として國語辭書の畫引索引には、少くとも辭書中に用ひられてゐる漢字は悉くこれが字義の説明を加へ（漢和字典と同様に）、これを頭とする熟語を排列して、その訓みと本文説明箇所との頁數とを示すべきである。かくて漢和字典は國語辭書中に吸收され、唯國語とならない漢熟語のみの辭書として、漢籍の讀者にのみその存在の意義を見出されるにすぎなくならう。

語原 國語解釋に、語原の説明は勿論必要である。然し古來わが國の語原に關する説明は鎌倉時代以後の辭書に見えるので、多くは牽強附會に流れて、採るべきものが少い。江戸時代に至つて貝原益軒の「日本釋名」が出て、多少、見るべきものがあるが、同時に杜撰な説も多い。新井白石の「東雅」に至つて始めて朝鮮語・梵語等をも參酌して、科學的に研究された。それに續いて源式如の「倭語小解」（五卷）、その子の知顯の「倭語拾補」（十五卷）、釋本寂の「和語私臆抄」（十八卷）も出たが「東雅」に比べて頗る見劣りがする。それ以來、隨筆などに散見するだけで、纏つた著書も少い。

現代に於ては、この方面の研究も漸く盛となり、闡明された語原も少くない。辭書としては、松岡靜雄の「日本古語大辭典」と「大言海」とに比較的多くの語原新説が試みられてゐるが、その悉くが學界の定説となつたとはいへない。

故に辭書編纂者が多數の原語に就いて個人の臆説を述べることはむしろ危險である。辭書に採擇す

る語原は、學者間の定説となつたものを採用するに止め、將來の研究を俟つて集成するより外は仕方がないであらう。

發音とアクセント 辭書にアクセントを附することは、平安朝時代の「類聚名義抄」の如きが既に試みてゐる。これは字訓に一々平・上・去の符號をつけてゐるのであるが、當時は、文化の中心が京都奈良等の近畿地方の地域に限られて居つたから、比較的容易であつたらう。現今では假りに東京語を標準語としてもその東京は各地方人の雜居であるから、これを決定するのは容易でない。これは國家事業として、文部省あたりで取調所を置いて調査の上決定することが必要である。今日では、平凡社の「大辭典」がその收容語七十五萬（内固有名詞その他二十八萬）中約五萬語にアクセントを附けた唯一の辭書であるが、もとより前記の如き國定のものではない。

アクセントに關聯して、萬國音標記號その他による發音を附することも必要である。例へば現代の東京語で「花が咲く」の「が」、「手拭」の「ぐ」は、ガ・グの文字を以て表はしてはゐるが、發音は鼻に抜けるか又はクである。縁側・宣言の「が」「げ」も同様である。その他「べらんめえ」の「ら」は卷舌であることは周知の通りであり、「とつけえべえ」のケエ・ベエはケー・ペーでエを特別に發音しない。これらを示さなければ、辭書として完全とは言へないと思ふ。然しこれもアクセントと同様國家

事業として確定さるべき問題であつて、少數個人の表音を辭書に掲げることは躊躇される。

方言 方言の採集研究は、江戸時代既に越谷吾山の「物類稱呼」があつたが、その後長く學界にうち捨てられてゐた。然し最近十年間にこの方面に對しても活潑な研究が行はれ、目醒しい勢で開拓されつつある。方言の收載は、勿論國語辭書として、必要である。現在平凡社の「大辭典」は、約四萬の方言を收容してあるといふが、何分にも全國に於ける方言の數は尨大なもので、蝸牛かたつむり一つでも百以上に上るといふ。そして一部漁夫間に使用される語、或ひは商人間にのみ行はれる符牒、若くは「隱語集」が収録した盜賊・博徒等の用語までも收容すると、僅に本來の國語辭書の何倍といふ數に上ることは想像に難くない。加之方言の收容には、アクセントと發音の差異による區別も掲げることがより多く必要であると考へられる。例へば前記「手拭」「縁側」は群馬縣では、東京語と異なり、「ぐ」「が」を本來の「グ」「ガ」と發音し、そこにアクセントを置くから、文字で書けば、ひとしく「テヌグイ」であり「エンガワ」であるが、東京語と異なる一つの方言として掲ぐべきであらう。かくすれば方言の數は愈々多くなる。故にこれらの方言の多くは、寧ろ特殊辭書として、國語辭書より切り離すべきで、國語辭書としては、古來文獻に表はれた著しいもののみを採擇することを以つて一まづ満足すべきであらう。

出典用例 辭書に出典用例を掲げるとは、不可缺の事柄である。出典は、その語の由來した古書の源を示し、用例はその語の使用を例示するのである。既往の辭典に於て、「和訓栞」・「雅言集覽」等は、特にこれが掲出に意を注ぎ、現在の辭書では、「大日本國語辭書」・「言泉」・「大言海」・「大辭典」は、何れもこれを收容してゐる。然し尙將來は進んでその出典の精確と用例の妥當とを期する必要がある。特に、上古語で現代まで意義の變化もなく、一貫して用ひられてゐるといふやうな語でも、出典の外に各時代の用例を一一掲出し、又或る語が一時死語となり、時代を隔てて復活したといふやうなものがあれば、これを證據づけるため、上古の出典と復活した時代の用例とを示すといふ様な用意まで進みたいものである。

挿畫 文章では到底言ひ現はし得ないものでも圖畫の挿入により、一目瞭然たらしめ得る場合は稀でないのであるから、挿畫は辭書には最も缺くを得ないものの一つである。國語辭書に挿畫を掲げたのは、「ことばの泉」あたりが最初と記憶してゐるが、裝飾的に繪を入れるといふのでは意味がない。あくまで語義の説明の完成を期するものでなくてはならない。然を言へば、色彩を入れたものも必要と考へるのであるが、この方面は百科辭書に比して、國語辭書は稍遅れてゐる。

固有名詞 國語辭書に固有名詞を收載するか否かは、實は便宜の問題である。現在辭書に就て見る

に、固有名詞の中特に人名（神名も）地名・書名等を全く省くものと、一部だけ収載するものとあつて、一定してゐない。これを省くといふのは、餘り浩瀚になるのを恐れるといふ以外に特別の意義がないやうである。然しこれを収載するとならば、出來得る限り網羅すべきで、申譯的に固有名詞も收容してあるといふのでは、寧ろない方が徹底してゐる。人名でも地名でも書名でも、その一つだけで優に一つの國語辭書に匹敵するだけの語數があるのであるから、これらの専門辭書に譲る方が、辭書として混亂を來さないかとも考へられる。然し一般國語辭書の説明中に表はれる固有名詞は、これを同一辭書中に収載するといふ標準で、採擇解説するのは一つの案であらう。